

6世紀における上毛野の前方後円墳規格系列

山 田 俊 輔

はじめに

精美な形態を示す前方後円墳が存在する背景には、古墳時代において綿密な設計とそれを施行する測量・土木技術があったことが考えられる。このことを念頭に、墳丘各部の相対比による設計原理の復元的研究（上田1979；甘粕1965；梶1975；石部他1979など）が、墳丘形態研究の初期段階においては主流を占めた。これらの諸研究においては様々な設計原理が提示されたが、同一の古墳でも異なる原理でその形態を説明することが可能であり、どの研究者の提示する設計原理が妥当なものかを判断することは容易でなかった。1980年代になると新しい分析法が登場する。その方法は測量図同士を重ね合わせ、その相同相違を検討する類型的研究（和田1981；北條1986；岸本1992；澤田2000など）と呼ばれるものである。墳丘測量図を直接比較するこの方法は設計原理という抽象化された分析概念を介在させず、資料実体の形態の特徴に基づく分類を試みようとするものである。この分析法では異なる古墳の右半、左半を合成して一つの前方後円形とし、その類似度を検討する。この類似度の検討のみで前方後円墳を分類・系列化することに対しては異論もある。確かに設計原理を把握しないまま形態分類をおこなっても、有意な分類をおこなうことは困難である。しかし、分析の対象となる資料は千年以上の時を経てある部分は風化し、また別の部分では堆積が進み、さらには人為的な改変などによって、設計・築造された形態から変化している。現況測量によるものに対して緻密な分析をおこなっても、良好な資料の選択なしには設計原理を反映させた議論をなすことは難しい。つまり、緻密な分析のみでは対応しきれない資料も多く存在する。そこで、多くの資料を分類・系列化する類型的研究法と精密な測量・土木技術の復元を目指す緻密な分析を併用して研究を進めるのが妥当な作業手順であろうと考える。例えば、類型的研究法である程度の整理をおこない、その成果を緻密な分析によって検証していくという方法などが考えられよう。

本稿では6世紀代の上毛野地域の前方後円墳を類型的研究法によって分析・検討をおこなうことで墳丘規格系列に関する一つの仮説を示し、今後の研究への叩き台としたい。

1. 上毛野地域における前方後円墳規格研究

上毛野地域における前方後円墳の比較研究は、梅沢重昭氏、若狭徹氏らによって試みられてき

た（梅沢1978；若狭1995）。梅沢氏は後円部の円（中心 O）、およびそれと同径の円（中心 O'）を前方部側に想定し、両円の 2 交点がくびれ部を決定するとの考えをもとに墳丘規格を復元し、両円が重ならない朝子塚古墳型、中心 O' の円が前方部両隅に接する浅間山古墳型、その円が前方部前面ラインに一点で接する天神山古墳型を設定した（梅沢1978）。若狭氏は梅沢氏の設定した型式を直接比較法によって検証し、設定型式の妥当性を追認した（若狭1995）。さらに、若狭氏は同様の方法を用いて 5 世紀後半代の上毛野西部地域の首長墓系列を検討し、井野川流域の首長墓は太田天神山古墳の築造規格を、烏川流域の諸古墳では浅間山古墳の築造規格を継承していることを指摘した。

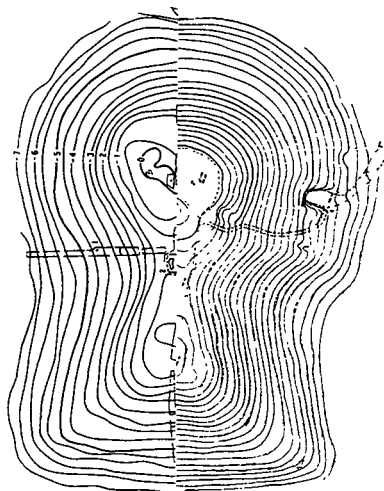
若狭氏の研究は 5 世紀後半代の首長墓動向に焦点を置いており、6 世紀代の動向については論じられていない。まず、梅沢氏によって設定され、若狭氏によって追認された天神山型、浅間山型が 6 世紀代にどのような展開を示しているかを検討することから始めたい。

2. 6 世紀前半代の墳丘規格

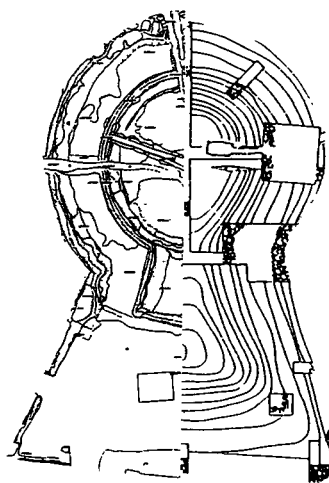
初期の横穴式石室をもち 6 世紀前半代の築造と考えられる首長墓としては前二子古墳、正円寺古墳、築瀬二子塚古墳、王山古墳、笹森稲荷山古墳などがあり、主体部構造は不明であるが墳丘形態、埴輪の様相から 6 世紀前半代の築造と考えられるものに七興山古墳、中二子古墳がある。これら諸墳を検討すると浅間山型に該当するものはないが、笹森稲荷山古墳が天神山型の範疇で理解できる。

笹森稲荷山古墳の墳長は 106m であり、太田天神山古墳のほぼ二分の一の規模である。両者を同大に加工し検討する（第 1 図左下）と、下段の形状は後円部径、くびれ部幅、前方部前端幅においてよく一致し、周溝の平面形もほぼ一致する。平坦面の位置は笹森稲荷山古墳が二段築成であるのに対して太田天神山古墳が三段築成であるため一致はみないが、上段の平面形は同じである。岸本直文氏の研究（岸本1992）によれば土師ニサンザイ古墳と市尾墓山古墳においても同様の現象が認められ、三段築成から二段築成へと移行する際に採用された設計改良方法であったと指摘されている。段築数の違いや時期的な隔たりがあるが、笹森稲荷山古墳は太田天神山古墳の二分の一規模で築造規格を共有した古墳であると考えられる。

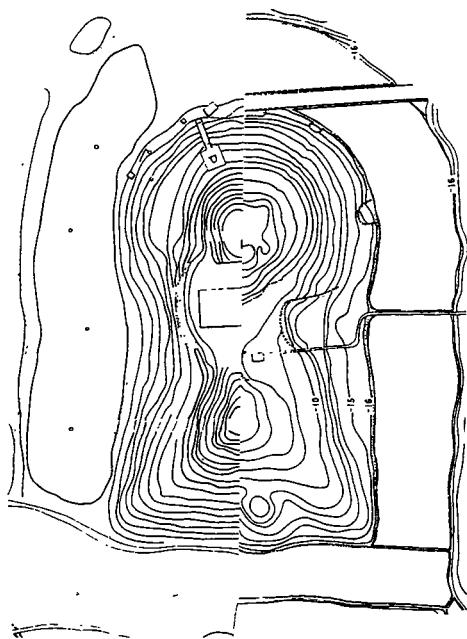
ほかの諸古墳を検討すると、正円寺古墳と前二子古墳、築瀬二子塚古墳と王山古墳が類似している（第 1 図上）。正円寺古墳と前二子古墳は前者が墳長 70m、後者が 92m と規模にやや違いがある。両者を同じ大きさに加工し比較すると、第一段は前二子古墳に比べ正円寺古墳の後円部の比率が小さく、その結果、前方部の相対的な長さも正円寺古墳のほうが長くなっている。第一段の形態は異なるが、平坦面の位置は一致する。また、第二段は後円部径、くびれ部幅、前方部前端幅など形態を規定する諸属性においてよく一致する。これらから、正円寺古墳と前二子古墳は同一規格の古墳であると考えられる。築瀬二子塚古墳と王山古墳は前者が墳長 78m、後者が 75.6m



正円寺古墳(1/1167)と前二子古墳(1/1500)



築瀬二子塚古墳(1/1300)と王山古墳(1/1300)



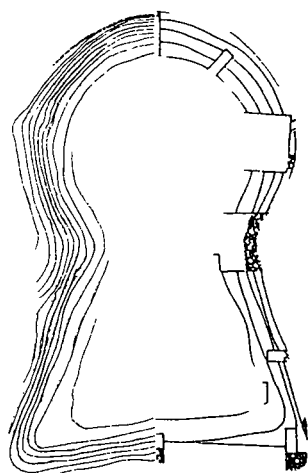
笹森稲荷山古墳(1/1750)と太田天神山古墳(1/3500)

第1図 6世紀前半の墳丘規格

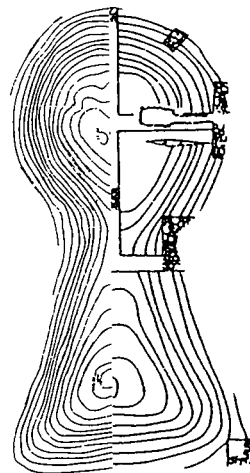
とその規模はほとんど同じである。田口一郎氏によって墳形がほぼ同じであることが指摘されている(田口1989)が、仔細に検討すると平坦面のあり方、くびれ部の幅なども一致し、同一規格の古墳であると考えられる。七興山古墳、中二子古墳は築瀬二子塚古墳などと一段目の形態は類似しているが二段目以上の形態が異なり、同一規格か否かは検討を要する。そこで前二子古墳と正円寺古墳を前二子型、築瀬二子塚古墳と王山古墳を築瀬二子塚型、七興山古墳を七興山型、中二子古墳を中二子型として検討を進める。

七興山型、中二子型、築瀬二子塚型は先述したように一段目の墳丘形態は比較的類似したものであるが、二段目以上の形態において

差異がある。特に七興山型と中二子型、築瀬二子塚型の差異は著しく、同一系統の墳丘規格とは考え難い。中二子古墳と築瀬二子塚古墳の第一段を比較すると後円部径において中二子古墳がやや大きい、前方部前端幅や全体のプロポーシオンはよく似ている(第2図左)。第二段を同じ大きさに加工し比較すると前方部幅、くびれ部幅はほとんど異ならず、中二子古墳の後円部の比率が築瀬二子塚古墳に比べて小さい点だけが異なっている(第2図右)。これら諸属性の多くにおい



中二子古墳第一段(1/1800)と
築瀬二子塚古墳第一段(1/1300)



中二子古墳第二段(1/1333)と
築瀬二子塚古墳第二段(1/1000)

第2図 築瀬二子塚古墳と中二子古墳の比較

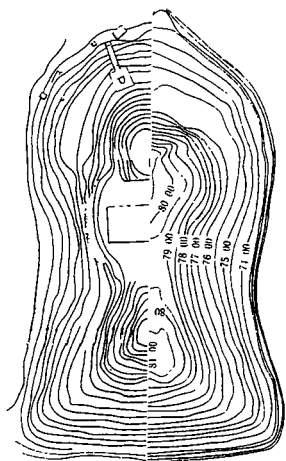
て関連をみせることから、この二つの規格に系統的關係があったことが考えられる。中二子古墳は築瀬二子塚型の築瀬二子塚古墳、王山古墳に後出すると考えられ、築瀬二子塚型からの型式変化の結果、中二子型が創出されたものと考えられる。この想定に従えば、中二子古墳の左隅角の張り出しを築瀬二子塚古墳の左隅角の墓道状施設からの型式変化として考えることができ、中二子古墳の左右非対称な墳丘形態を理解することも可能となる。

若狭氏の研究によって5世紀後半代においては、天神山型、浅間山型の2規格が盛行することが明らかにされている。しかし、6世紀前半代に新たに登場する墳丘規格と天神山型、浅間山型を比較するとその差異は著しく、その系譜は天神山型、浅間山型に辿れるものではなく、新しく創出された、あるいは、新たにもたらされた墳丘規格であると考えられる。

3. 6世紀後半代の墳丘規格

6世紀後半代の首長墓としては、綿貫観音山古墳、後二子古墳、二ツ山1号墳、総社二子山古墳、前橋二子山古墳、八幡観音塚古墳などがある。これらの諸墳を浅間山型、天神山型、七輿山型、前二子型、中二子型、築瀬二子塚型と比較すると浅間山型は認められないが、綿貫観音山古墳が天神山型に、二ツ山1号墳、総社二子山古墳が中二子型に、前橋二子山古墳が前二子型の範疇に含めえる。

綿貫観音山古墳と天神山古墳を同大に加工し比較すると、下段の形状は後円部径、くびれ部幅、前方部前端幅においてよく一致する。しかし、平坦面の位置は笹森稲荷山古墳の場合と同様に、綿貫観音山古墳が二段築成であるのに対して太田天神山古墳が三段築成であるため一致はみない。



次に綿貫観音山古墳と笹森稲荷山古墳を同大に加工し、比較してみる（第3図左上）。両者は下段の形状、平坦面の位置もよく一致し、同一の墳丘規格で築造されたと考えることができる。

前橋二子山古墳と前二子古墳を同大に加工し、比較したのが第3図右上である。前二子古墳に比べ前橋二子山古墳の後円部径がやや小さく、前方部が相対的に長いが全体の形状はよく似ている。さらに、平坦面の位置、第二段の形態もよく一致し、前二子古墳と前橋二子山古墳は同じ墳丘規格系列の古墳であると考えられる。

二ツ山1号墳と中二子古墳を同大に加工し、比較したのが第3図中である。両墳とも前方部のむかって左側の隅角が長いいため左右対称とはならないが、平坦面のあり方や第二段の形態はよく一致している。総社二子山古墳と中二子古墳も、平坦面のあり方、第二段の形態はよく一致する（第3図下）。これらのことから、中二子古墳と二ツ山1号墳、総社二子山古墳は同一の規格を共有した古墳であると考えられる。

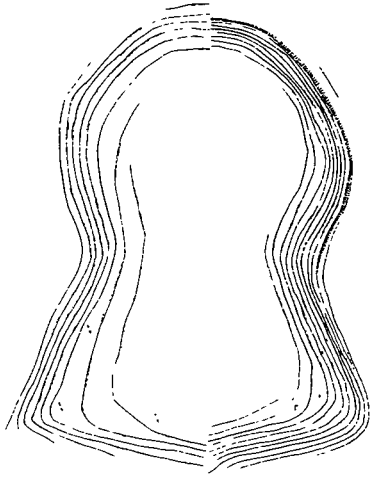
後二子古墳は、中二子型に近い形態のものであるが相違する部分も見受けられる。後二子古墳を中二子型の系統として理解できるかどうか次に検討してみる。

後二子古墳と中二子古墳の第一段、第二段をそれぞれ同大に加工し、比較したのが第4図である。第4図左上は、前方部前端中央でとがる形状となり、左右の測量図を入れ替えた第4図右上では前方部前端中央で窪む形状となっている。この形状の異様さは個々の古墳の形態に立ち返ることによって解決する。中二子古墳が向かって左側の隅角が張りだすのに対して、後二子古墳では逆に向かって右側の隅角が張り出しているため、個々の左右を合成すると違和感のある図となるのである。逆に左右対称となることは、中二子古墳と後二子古墳の墳丘設計が左右反転してなされていた可能性を示唆する。それぞれの比較図を検討すると、第一段の形態、平坦面の位置はよく一致する。第二段目の平面形態を等しい大きさに加工し比較してみると（第4図左下）、前方部前端幅、くびれ部幅はほとんど同じであり、後円部の比率において後二子古墳が小さいという点だけが異なる点として指摘できる。中二子古墳、後二子古墳の先後関係は、埴輪、須恵器の型式によって中二子古墳が後二子古墳に先行することが明らかであり、墳丘のプロポーシオンは墳丘第一段がほとんど変化せず、第二段の後円部の比率が減ずるという変化の方向を推定できる。この変化傾向は築瀬二子塚型と中二子型の間にも認められ、両者が同一系統の墳丘規格系列に属していることを示していると評価できる。

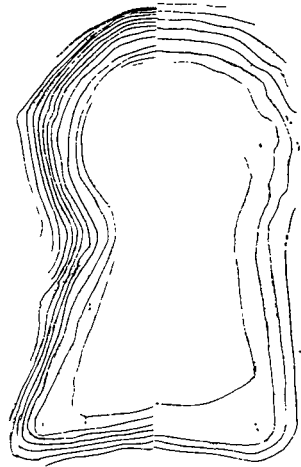
八幡観音塚古墳は他の墳丘規格とは型式的な隔たりが大きく、系列的な関係を論じることが難しい。本稿では暫定的に観音塚型としておく。

4. 墳丘規格系列の評価

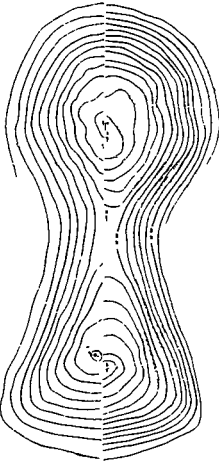
これまでの検討から明らかとなった墳丘規格の系列を示せば、第5図のようになる。太田天神山古墳から綿貫観音山古墳へと続く天神山系列、浅間山古墳から上並榎稲荷山古墳へ至る浅間山



後二子古墳第一段(1/1370)と
中二子古墳第一段(1/1800)



中二子古墳第一段(1/1800)と
後二子古墳第一段(1/1370)



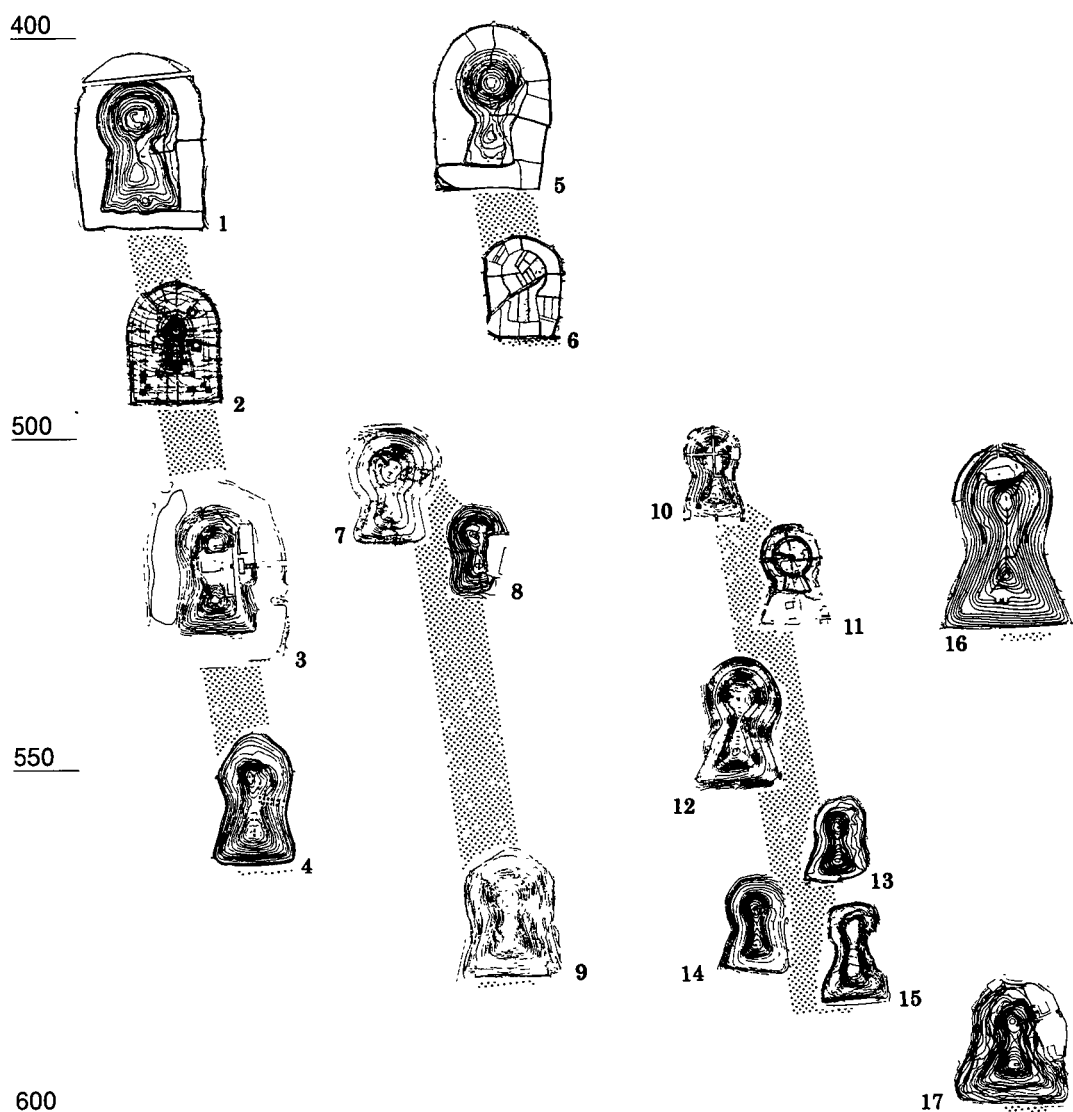
後二子古墳第二段(1/833)と中二子古墳第二段(1/1333)

第4図 中二子古墳と後二子古墳の比較

系列、前二子古墳－正円寺古墳－前橋二子山古墳と続く前二子系列、築瀬二子塚古墳－王山古墳－中二子古墳－後二子古墳－二ツ山1号墳－総社二子山古墳へと続く築瀬二子塚・中二子系列、独立した存在である七輦山古墳、八幡観音塚古墳などである。これら墳丘規格系列の通時的なあり方からは、6世紀前半に大きな画期を認めることができる。それは横穴式石室の導入、特大型円筒埴輪の採用という事象とも連動しており、古墳造営に関する新たな情報が6世紀前半にもたらされたものと評価できる。

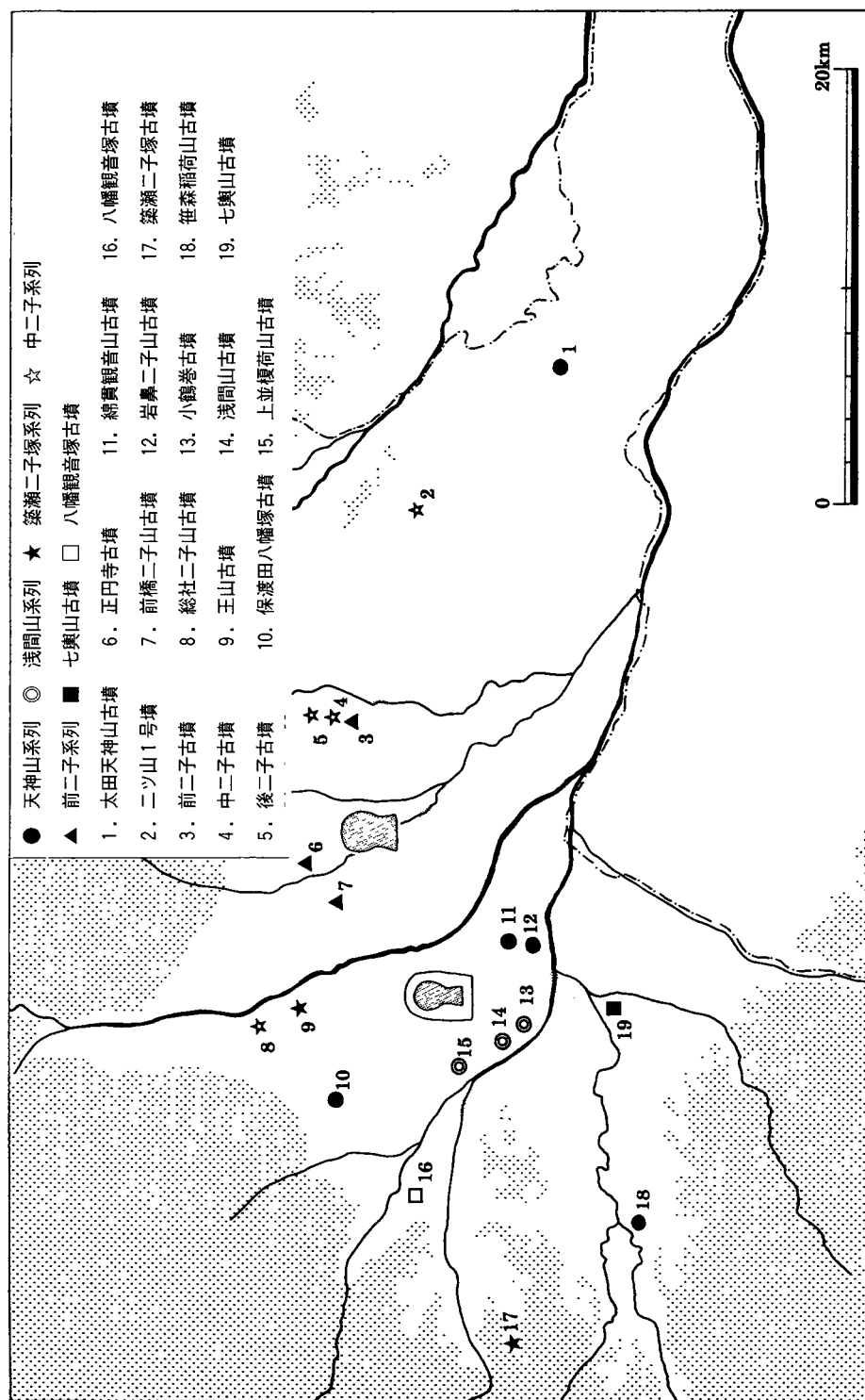
各系列の分布は前二子系列が赤城山南麓に、浅間山系列が烏川中流域に集中的に分布し、天神山系列、築瀬二子塚・中二子系列は広域に散漫に分布している(第6図)。この分布傾向からは、小地域の首長に世襲的に継承される墳丘規格と地域に限らず墳丘規格を共有するものの二相があることが窺える。つまり、墳丘規格は等質な性格のものではなく、そのなかにも差異があると考えられる。次に、墳丘規格系列の通時的動向を検討してみる。

5世紀後半には、天神山型の岩鼻二子山古墳(墳長112m)、保渡田八幡塚古墳(墳長102m)、不動山古墳(墳長94m)や浅間山型の上並榎稲荷山古墳(墳長122m)、小鶴巻古墳(墳長88m)



- | | | | |
|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. 太田天神山古墳 | 6. 上並榎稻荷山古墳 | 10. 築瀬二子塚古墳 | 14. 後二子古墳 |
| 2. 保渡田八幡塚古墳 | 7. 前二子古墳 | 11. 王山古墳 | 15. 総社二子山古墳 |
| 3. 笹森稻荷山古墳 | 8. 正円寺古墳 | 12. 中二子古墳 | 16. 七輿山古墳 |
| 4. 綿貫観音山古墳 | 9. 前橋二子山古墳 | 13. ニツ山1号墳 | 17. 八幡観音塚古墳 |
| 5. 浅間山古墳 | | | |

第5図 墳丘規格の諸系列 (左上4基は $S = 1/12000$, それ以外は $S = 1/6000$)



第6図 墳丘規格系列の分布

などが築かれる。若狭氏が指摘するように、5世紀後半にあっては天神山型、浅間山型が盛行する。

6世紀前半は複数の墳丘規格が並立する。天神山型の笹森稻荷山古墳（墳長106m）、前二子型の前二子古墳（墳長93m）、正円寺古墳（墳長73m）、七輿山型の七輿山古墳（墳長145m）、中二子型の中二子古墳（墳長108m）と複数の墳丘規格系列が並立する。七輿山古墳が傑出しているが、ほかは「どんぐりの背比べ」で拮抗した規模で並立する。

6世紀後半は、天神山型の綿貫観音山古墳（墳長97m）、中二子型の二ツ山1号墳（墳長74m）、後二子古墳（墳長82m）、総社二子山古墳（墳長90m）、前二子型の前橋二子山古墳（墳長104m）、観音塚型の八幡観音塚古墳（墳長96m）が築かれる。墳丘規模は拮抗しているが、中二子型がより広範囲に分布しており、中二子型の優位が窺われる。

その後は前方後円墳がほとんど築かれなくなり、総社古墳群だけに大型の方墳が造営されるようになる。白石太一郎氏は6世紀の上野の前方後円墳規格が多様であることと7世紀の総社古墳群の傑出を論拠に「6世紀代の上野に…（中略）…上野全域に何らかの広域的な支配権を及ぼすような支配組織の存在は認め難い」とされる（白石1992 p.44）。しかし、今回の墳丘規格系列の整理からは、6世紀後半において中二子型のように広域に分布し、優勢となる墳丘規格も存在することを指摘できる。総社古墳群の造営が開始される前段階においてすでに「広域的な支配組織」ができあがり、地域社会が変わりつつあった可能性を提起しておきたい。

おわりに

本稿では既存の資料を用いて6世紀代の上毛野地域における前方後円墳の墳丘規格系列を検討してきた。しかし、これまでに資料化されているもののみを祖上に分析・検討をおこなったものであり、測量図の作成されていないものについては検討を果たせていない。また、今回設定した系列それぞれにおける設計技術の把握はできておらず、今回示した系列は単なる形態分類上のものに過ぎない。設計技術の把握を通じて設定系列の妥当性を吟味するには、原資料に立ち返って情報を取り直す必要も少なからずある。今後、この課題にも取り組み、今回提示した仮説を検証していくことにしたい。

引用・参考文献

- 甘粕 健 1965 「前方後円墳の研究—その形態と尺度について」『東洋文化研究所紀要』37, 東洋文化研究所, pp.1-110.
- 梅沢重昭 1978 「毛野の古墳の系譜」『考古学ジャーナル』150, ニューサイエンス社
- 1998 「第6章 1. (2) 綿貫観音山古墳の設計・企画」『綿貫観音山古墳Ⅰ 墳丘・埴輪編』, 群馬県考古資料普及会, pp.427-42.
- 上田広範 1979 『前方後円墳』[第2版], 学生社
- 岸本直文 1992 「前方後円墳築造規格の系列」『考古学研究』39-2, 考古学研究会, pp.45-63.

梶 国男 1975 『古墳の設計』, 築地書館

倉林眞砂斗 2000 「第3章第5節 前方後円墳秩序の素描—吉備中枢との関わりから—」『美作の首長墳—墳丘測量調査報告—』[近藤義郎監修], 吉備人出版, pp.159-192.

澤田秀実 2000 「第3章第1節 墳丘形態からみた美作諸古墳の編年的位置付け」『美作の首長墳—墳丘測量調査報告—』[近藤義郎監修], 吉備人出版, pp.95-120.

白石太一郎 1992 「関東の後期大型前方後円墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』44, 国立歴史民俗博物館, pp.21-51.

田口一郎 1989 「群馬県西部における初期横穴式石室の様相」『東日本における横穴式石室の需要』, 群馬考古学研究所, pp.578-616.

北條芳隆 1986 「墳丘に表示された前方後円墳の定式とその評価—成立当初の畿内と吉備の対比から—」『考古学研究』32-4, 考古学研究会, pp.42-66.

右島和夫 1990 「古墳から見た5、6世紀の上野地域」『古代文化』42-7, 古代学協会, pp.391-40

1992 「古墳から見た6、7世紀の上野地域」『国立歴史民俗博物館研究報告』44, 国立歴史民俗博物館, pp.469-515.

若狭 徹 1995 「上野西部における5世紀後半の首長墓系列—保渡田八幡塚古墳の設計企画を起点として—」『群馬考古学手帳』5, 群馬土器観会, pp.29-49.

和田晴吾 1981 「向日市五塚原古墳の測量調査より」『王陵の比較研究』, 京都大学考古学研究室, pp.49-63.

【図版出典】

後二子古墳：前原豊ほか1992『後二子古墳』大室公園史跡整備事業に伴う範囲確認調査概報Ⅰ, 前橋市教育委員会
王山古墳：松島栄治ほか1991「群馬県前橋市王山古墳の調査」『日本考古学協会第57回総会研究発表要旨』, 日本考古学協会

太田天神山古墳：梅沢重昭1981「天神山古墳」『群馬県史』資料編3, 群馬県史編さん委員会

笹森稲荷山古墳：外山和夫1986「笹森稲荷山古墳」『古墳めぐりハンドブック』, 群馬県立歴史博物館友の会

正円寺古墳：松本浩一1981「正円寺古墳」『群馬県史』資料編3, 群馬県史編さん委員会

総社二子山古墳：石川正之助1981「総社二子山古墳」『群馬県史』資料編3, 群馬県史編さん委員会

七輿山古墳：志村哲1993「七輿山古墳」『藤岡市史』資料編原始・古代・中世, 藤岡市史編纂室

中二子古墳：前原豊ほか1995『中二子古墳』大室公園史跡整備事業に伴う範囲確認調査概報Ⅱ, 前橋市教育委員会

前橋二子山古墳：加部二生1994「前橋二子山古墳」『前方後円墳集成』東北・関東編, 山川出版社

前二子古墳：前原豊ほか1993『前二子古墳』大室公園史跡整備事業に伴う範囲確認調査概報Ⅱ, 前橋市教育委員会

ニツ山1号墳：井上唯雄1987「ニツ山1号墳」『新田町誌』資料編(上), 新田町

築瀬二子塚古墳：右島和夫ほか1997「碓氷川流域における横穴式石室の受容」『日本考古学協会第63回総会研究発表要旨』, 日本考古学協会

八幡観音塚古墳：田島桂男1981「観音塚古墳」『群馬県史』資料編3, 群馬県史編さん委員会

綿貫観音山古墳：徳江秀夫編1998『綿貫観音山古墳Ⅰ 墳丘・埴輪編』, 群馬県考古資料普及会